

通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための 連携スキルに関する探索的研究 (10)

— 連携スキルの概念整理と研修内容の設計方針 —

小山聖佳・上川達也*

佐々木全・東信之・池田泰子・鈴木恵太・千葉紅子・菅原亨・照井正孝・高橋縁**,

名古屋恒彦***, 坪谷有也****, 森山貴史*****,

滝田充子*****, 石川えりか*****, 及川藤子*****

*岩手大学大学院教育学研究科教職実践専攻, **附属学校特別支援教育連携専門委員会,

植草学園大学発達教育学部, *岩手県立盛岡みたけ支援学校, *****青森県立八戸第一養護学校

*****花巻市石鳥谷中学校, *****岩手県立紫波総合高等学校, *****岩手県立水沢農業高等学校

(平成31年3月4日受理)

1. はじめに

通常学級^{注1)}における特別支援教育を効果的に実践すべく、特別支援教育コーディネーターをはじめとする教師の地道な努力が求められている。その内容として「連携」がある。そもそも幼児児童生徒が有する個別多様な教育的ニーズには、ときに医療的ニーズや福祉的ニーズなどが不可分の内容として含まれる。学校がこれに応じて支援しようとする際には、多様な専門性を求められ、チーム学校として組織的に対応することが求められている¹⁾。

このような現状にあって、教師の連携のための技能あるいは要領が問われるのは必然であろう。「附属学校特別支援教育連携専門委員会」(以下、本委員会と称する)では、これを「連携スキル」と称して求め、その伸長に資する研修プログラムの開発をめざしている。この取り組みは平成28～33年度の事業であり、教育現場の連携事例を収集し、その中において発揮されている連携のスキルを探索している。

2. 連携スキルの概念整理

本委員会による一連の報告及び関連する報告から帰納的に得られた連携スキルとして、「ティームワークの構想や調整、外部連携における援助要請先の選定と連絡調整」や「支援の対象としての幼児や保護者、さらには同僚に対する理解と対応」²⁾「外部の資源活用では、資源自体を開発すること」や「関係者や関係機関の力量や専門性を把握すること」³⁾などがあった。

これらを見渡すと、各内容間では具体と抽象の水準が不揃いだったり、連携の対象による分類や連携のための実務行為による分類が混在していたりするなどの未整理な状態であり、一般化して考えることがしにくかった。

そこで、帰納的に見出した連携スキルの内容について、本稿では「コンサルタントとして求める資質や技能」^{4) 5)}に対照させ、演繹的にその概念を整理する。そもそも「コンサルタントとして求める資質や技能」とは、特別支援学校のセンター的機能を果たすべく示された6つの力である。これらは「研修や研鑽を深めることは特別支援教育コーディネーターの役割を実践していく上での基礎となる」と指摘されつつも、その運用においては「地域の支援体制の在り方や学校・学級の実情、各教員の力量等に

注1) 本稿を含む一連の研究の標題及び本文では慣例として「通常学級」を「通常学級」と表記している。そもそも「通常学級」は公用語ではなく、特別支援学級との対比から「通常学級」と通称されたものが短縮されたものにすぎない。

よっては、これらの資質や技能が必ずしも必要でない場合もあり」、「一人のコーディネーターが備えるべきものとしては広範囲に渡る資質や技能でもある」と付言されている。

以下では、これまでの報告から得られた連携スキルについて、連携事例と「コンサルタントとして求める資質や技能」としての6つの力に対照させ、演繹的にその概念整理を試みた。なお、ここでは6つの力との表記について、本稿では6つのスキルと置き換えて考えた。

そもそも連携においては、特別支援教育コーディネーターが連携すべき対象範囲の多様さ（担任、管理職はじめ校内の多様な役職者、保護者、出身校園等、進路先、医療機関、福祉機関、行政機関、民間外部専門家、その他の地域資源）、連携の目的や機会の多様さなどが重層的に組み合わせられる。このため、連携を体系的に整理することが困難であったり、逆に連携と概括的・抽象的にとらえ細部を詰め切れなかったりということもある。そこで、本稿での6つのスキルでの整理は、連携を体系化する上でも有用であると考えられる。

（１）コーディネーションのスキル

コーディネーションのスキルは、校内外の資源と子どもの教育的ニーズを結び付けるスキルであり、校内外のさまざまな人的資源や組織作りとその活用を積極的に行っていくことに際して発揮されることが想定されている。

これに分類された内容として「子どものニーズと関係者や関係機関の力量や専門性それらを踏まえ両者をマッチングさせること」⁶⁾「S S W r のインテイクのアシスト役」⁷⁾があった。

（２）コンサルテーションのスキル

コンサルテーションのスキルは、保護者や担任教員へのアドバイスや指導法について提案や助言等をするスキルであり、校内で支援を必要とする子どもと教員、あるいは小中学校への支援に際して発揮されることが想定されている。

これに分類された内容として「教師同士の水平方向の関係性というべき同僚性」⁸⁾「情報の共有方法や関係性」⁹⁾「ケースワークにおける実践的

スキル」¹⁰⁾「個別の指導計画リテラシー」¹¹⁾があった。

（３）ファシリテーションのスキル

ファシリテーションのスキルとは、必要な連絡調整を行い、校内の教員等の力を集めて、指導・支援の取り組みを促進するスキルであり、校内の組織体制作り、あるいは小中学校での組織体制作りに際して発揮されることが想定されている。

これに分類された内容として「内部連携」¹²⁾「ハブ人材へのアクセス」¹³⁾「外部連携における援助要請先の選定と連絡調整のようなマネジメント技能」¹⁴⁾「連携の形式として、垂直方向の関係性というべき下支え、支援者支援」¹⁵⁾「鳥瞰的に状況を把握し、校内資源を適材適所に配置しそれをこなす舵取り」¹⁶⁾「情報の共有方法や関係性」¹⁷⁾である。「連携促進の仕組みづくり」や「ケースワークに関するマネジメント」¹⁸⁾「S S W r の情報収集のアンテナ役」¹⁹⁾があった。

（４）ネットワーキングのスキル

ネットワーキングのスキルとは、地域の各種資源との間にネットワークを構築するものであり、校外の各種専門性を持った機関との連携に際して発揮されることが想定されている。

これに分類された内容として「就学・小学校への接続」や「外部連携」²⁰⁾「予備的ネットワークの構築」や「ハブ人材へのアクセス」²¹⁾「外部連携における援助要請先の選定と連絡調整のようなマネジメント」²²⁾「外部の資源自体を開発すること」²³⁾「外部資源に関する予備的ネットワーク作りのスキル」²⁴⁾があった。

（５）カウンセリングのスキル

カウンセリングのスキルとは、保護者や担任への相談の窓口的役割を担うものであり、保護者や子どもの問題への気付きや初期の情緒的な混乱、あるいは教員の心理的な負担等に対応する際に発揮されることが想定されている。

これに分類された内容として「同僚性の発揮」²⁵⁾「保護者支援」²⁶⁾があった。

（６）アセスメントのスキル

アセスメントのスキルとは、子どもと子どもを取り巻く環境を含めて問題の実態を把握し支援を組み立てるスキルであり、問題の実態把握と実際の支援方法の組み立てに際して発揮されることが想定されている。

これに分類された内容として「早期発見・早期対応」²⁷⁾「連携の発端である子どものニーズを把握すること」や「関係者や関係機関の力量や専門性を把握すること」²⁸⁾「子ども等の見立て」や「資源のアセスメントに関するスキル」や「鳥瞰的に状況を把握し、校内資源を適材適所に配置するためのアセスメントの力量」²⁹⁾があった。

3. 6つのスキルの発揮の様相

以上の「コンサルタントとして求める資質や技能」になぞらえた6つの連携スキルがいかなる場面で発揮されているのか、その様相について事例をもって示す。なお、個人や学校の特定を避けるために、記述の一部に複数事例を混成した。

(1) 事例

A高等学校では、本委員会との連携によって校内の特別支援教育推進体制を構築、促進している。その舵取り役である特別支援教育コーディネーターB教諭の動きについて記述する。

特別支援教育コーディネーターのB教諭は、校内で教育相談課の一員として、教育相談の実務を担当しており、特別な支援を必要とする生徒が非常に多いことを察知した。実はそのような生徒は、A高等学校では従来から在籍していたのだが、その多くは個別具体的な生徒指導等の事案によって、随時注目されていた。例えば、問題行動や生活習慣の未定着など生徒指導上の注目、学業不振や授業態度など学習指導上の注目、進路目標の未決定や意欲の不足など進路指導上の注目などである。

B教諭は、これらの生徒の多くには、背景として発達障害等の特性があることを見出した。それによって、生徒の教育的ニーズについて特別支援の観点をもって整理をすることを開始し、アセスメントや対応策について、包括的に計画実施するに至った。

ここで支援の対象の一人となったCさん(1年生、女子)の事例である。Cさんは、対人トラブルが絶えず、周囲の生徒から敬遠され始めていた。また、学業不振に加え、教師に対する過度な警戒があり、時に反抗的な態度をあらわにした。経済的困窮を抱える家庭においては、虐待めいた不適切養育の状況があることも明らかになった。

特別支援教育コーディネーターのB教諭は学級担任との連携し、放課後に面接し、対人関係を巡るトラブルの原因と自己の日常の言動との関係について話し合うことにした。

Cさんが他者の心情を推察することに、明らかな不足があり、保護者や出身中学校から生育歴の聴取を行ったところ、アスペルガー障害の診断がなされていた事実が明らかになった。このような発達特性によって生ずる周囲との軋轢の結果が、保護者による不適切な養育や、周囲の生徒による敬遠などにつながっているようだった。

そこで、B教諭は、Cさんの日常の言動について、その発達特性との関連から、保護者と担任それぞれに説明をした。加えて、これまでの養育あるいは生徒指導等について労い、併せてこれまでの養育あるいは生徒指導等におけるエピソードについて聴取し、Cさんの発達特性との対応について指摘した。

例えば、両者に共通したエピソードの一つに「片づけなさいと何度言っても片づけをしない、不機嫌になり悪態をつく」というものがあった。このことについてB教諭は、「片づける」という行為自体の要領が伝わっておらず、「片づけない」のではなく「片づけられない」との解釈し説明した。そのことを自分で説明できず、加えてできないことを求められることにストレスを感じ、結果として反抗的な態度が露呈しやすい。具体的な要領として「ロッカーには教科書を右側に立てて置く。左側にバックを置く。その上に着替えを置く」などを伝えてはどうかと提案をした。この説明においては、「物品を定位に戻すなどの要領が明確な場面での片づけはスムーズである」ことなどの別エピソードを対比し根拠づけた。

これによって、保護者は養育上うまくいかないと

感じている事柄の多くが、Cさんに対する指示表現における具体性が不足していたことに気が付いた。その例として「毎朝、登校前に（準備を）早くしなさいと促すが、余計にへそを曲げる」とのエピソードがあったが、指示表現をどのように具体化してよいか思いつかないとのことが語られた。そこで、B教諭は、「7時15分になったら歯磨きを始めましょう、5分で終わらしましょう」などの表現を例示したうえで、どのような表現が伝わりやすいかを日常的に確認し、微調整をすることが必要であると伝え、定期の支援会議の際に、その成果に関する情報提供を依頼した。このことは担任にも伝達され、また、担任にも学校生活における同様の取組をし、定期の支援会議における情報提供を依頼した。

他にも、B教諭は、学校内外におけるネットワークをもって以下の4つの対応を実施した。

第一に、近隣の特別支援学校のセンター的機能を活用し、Cさんに対してWISC-IVの実施をし、そこに反映された認知の特性と学習状況についての関連を探り、担任や教科担任に情報提供した。

第二に、本委員会委員及び大学院生を交えた授業参観及び授業研究会をもって、Cさんに対する学習支援について検討した。なお、このことは、Cさんに着目しつつも、他にも複数いる特別な支援を要する生徒をも含めた授業づくりとして、同時期に校内で進められようとしていたユニバーサルデザイン授業の推進に併せ一体的に位置づけ、教務課との連携によって推進された。

第三に、家庭での生活状況における福祉的な支援として、スクールソーシャルワーカーへの対応を依頼した。スクールソーシャルワーカーは、保護者との面談を経て、社会福祉協議会等への相談について進めることとした。これを端緒としたスクールソーシャルワーカーと保護者とのかかわりは、内々の意味付けとして、虐待様の養育状況に対する警戒でもあり、モニタリングとしての機能がかった。このことは生徒指導課との間で情報共有された。

第四に、進路支援について、地域の特別支援学校の進路指導部が主催し運営する「圏域ネットワーク会議」^{注2)}にも参加し、Cさんをはじめとする、特

別な支援を必要とする生徒を対象とした多様な進路の推進に向けたネットワークづくりが進められている。このことについては、進路指導課との協働によって進められた。

（2）連携スキルの発揮の様相

事例における連携スキルの発揮は、以下のように指摘することができた。

まず、特別支援教育コーディネーターは、対象生徒の支援ニーズを察知したことに端を発し、担任との連携の下、生徒本人との面談、保護者面談ならびに出身中学校からの情報収集、心理検査の実施などの実働があった。ここでは、アセスメントのスキルが発揮された。

このなかで、保護者や担任への相談の窓口的役割が遂行されており、それによって具体的な支援の実施が導入されていた。ここでは、カウンセリングのスキルの発揮があった。この面談場面では保護者や担任教員へのアドバイスや指導法について提案や助言等がなされていた。ここでは、コンサルテーションのスキルが発揮された。

次に、校内での授業研究会の実施は、校内の教員等の力を集めて、指導・支援の取り組みを促進する一つの仕組み作りでもあった。また、特別支援教育コーディネーター自身が所属する教育相談課と、教務課、生徒指導課、進路指導課の連携による取組によって実施された。ここでは、ファシリテーションのスキルが発揮された。

併せて、スクールソーシャルワーカーや近隣の特別支援学校や大学との連携や「圏域ネットワーク会議」への参加などがなされた。ここでは、ネットワークスキルのスキルが発揮され、これらを基盤にして、コーディネーションのスキルも発揮された。

注2)「圏域ネットワーク会議」とは、圏域出身者の在籍する県内特別支援学校の進路担当者、県や市町村の福祉課担当者、労働機関、圏域自立支援協議会、圏域内の福祉サービス事業所、特別な支援を必要とする生徒が在籍する高等学校の担当者が一堂に会し、進路指導に関する情報交換を行っている。

4. 研修プログラムの内容としての連携スキル

連携スキルの発揮の様相は、文脈に独立して個別的に、順次発揮されているものではなく、文脈に即して必然性と必要性をもって、連なり、時に同時に組み合わせあって発揮されていた。

このようなことから、本委員会で目指している連携スキルの伸長に資する研修プログラムについて次のような設計方針を見出した。すなわち、これら6つの連携スキルを個別的に抽出し研修内容とするよりも、6つの連携スキルの全部あるいは一部が必然的に含まれる「一連の目的的な連携の営み」それ自体を研修内容として設定することの方が、実際場面に適用しやすく、現実的であると考えられる。

ここでいう「一連の目的的な連携の営み」の例として、個別の指導計画の作成と活用がある。これを支援し促進するための要領としての「後方視的対話」があった^{30) 31) 32)}。この実施プロセスでは、担任等の個別の指導計画を作成しようとする教師との対話がなされる。そこには、アセスメント、コンサルテーション、コーディネーション、カウンセリングのスキルが発揮されるであろうことが想定される。このことは別稿にて報告する。

今後、本委員会では研修内容としての「一連の目的的な連携の営み」のレパトリーを見出し、その連携の営み自体に資すること、並びにそこに含まれるであろう連携スキルの伸長に資する研修プログラムの開発に努めたい。

謝辞

本稿執筆にかかわりご理解とご協力をいただきました皆様記して感謝申し上げます。

文献等

- 1) 中央教育審議会 (2015) : チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申) . http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365657.htm (2018. 7. 23. 閲覧).
- 2) 佐々木全・下山恵・北條早織・石川幸子・高橋

文子・千葉紅子・渡邊奈穂子・小川恵美子・伊藤典子・菊池明子・佐々木弥生・中村くみ子・佐藤信・滝吉美知香・我妻則明 (2017) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (1) —幼稚園・保育園・認定こども園における連携事例に基づく検討—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 4, 120-125.

- 3) 佐々木全・尾崎尚子・山本一美・阿部真一・関口栄子・菊池明子・佐々木弥生・中村くみ子・佐藤信・滝吉美知香・我妻則明 (2017) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (2) —小学校における連携事例に基づく検討—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 4, 126-131.
- 4) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2007) : 学校コンサルテーションを進めるためのガイドブック. ジアース教育新社
- 5) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 (2010) : 特別支援教育を推進するための地域サポートブック. ジアース教育新社
- 6) 佐々木全・東信之・名古屋恒彦・池田泰子・滝吉美知香・我妻則明・菊池明子・那須川智子・奥谷正彦・柿崎明広・菅原慶子・佐藤陽子・中野喜美子・五安城正敏・佐々木徹 (2017) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (4) —特別支援教育エリアコーディネーターの取組実態からの考察—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 4, 138-143.
- 7) 佐々木全・高橋岳志 (2016) : 高等学校におけるスクール・ソーシャルワーカーの有効活用に資する特別支援教育コーディネーターの連携 内容, 第11回日本学校ソーシャルワーク学会全国大会 in 東京, 42-43.
- 8) 前掲論文4)
- 9) 佐々木全・東信之・名古屋恒彦・池田泰子・滝吉美知香・我妻則明, 菊池明子・那須川智子・奥谷正彦・柿崎明広・菅原慶子・佐藤陽子・中野喜

- 美子・五安城正敏・佐々木徹 (2017) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (5) —特別支援教育エリアコーディネーターが経験した苦慮事例を通して—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 4, 144-149.
- 10) 坪谷有也・佐々木康人・高橋康次・及川藤子・石川えりか・下山恵・阿部真一・照井正孝・佐藤信・東信之・池田泰子・名古屋恒彦・佐々木全 (2018) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (6) —特別支援教育コーディネーターによる校内連携に着目して—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 5, 131-136.
- 11) 佐々木全・東信之・池田泰子・名古屋恒彦・川村真紀・山本一美・高橋和志・佐々木弥生・田口ひろみ・坪谷有也・小山聖佳・上川達也・滝田充子・石川えりか・及川藤子 (2018) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (8) —「後方視的対話」汎用による個別の指導計画作成の事例を通して—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 5, 143-148.
- 12) 佐々木全・東信之・池田泰子・名古屋恒彦・下山恵・阿部真一・照井正孝・佐藤信・石川えりか・及川藤子・坪谷有也 (2018) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (9) —外部連携に資する予備的ネットワークづくりに着目して—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 5, 149-154.
- 13) 前掲論文 12)
- 14) 前掲論文 2)
- 15) 前掲論文 3)
- 16) 佐々木全・芳門淳一・高橋知志・照井正孝・滝田充子・千葉友夏・池田泰子・滝吉美知香・我妻則明 (2017) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための 連携スキルに関する探索的研究 (3) —中学校における連携事例に基づく検討. —岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 4, 132-137.
- 17) 前掲論文 9)
- 18) 前掲論文 10)
- 19) 前掲論文 7)
- 20) 前掲論文 2)
- 21) 前掲論文 12)
- 22) 前掲論文 2)
- 23) 前掲論文 3)
- 24) 佐々木全・東信之・池田泰子・名古屋恒彦・北條早織・根木地淳・岩館良子・菊池明子・坪谷有也・滝田充子・及川藤子 (2018) : 通常学級における特別支援教育を効果的に実践するための連携スキルに関する探索的研究 (7) —保育園や学校等における外部連携に着目して—. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 5, 137-142.
- 25) 前掲論文 3)
- 26) 前掲論文 2)
- 27) 前掲論文 2)
- 28) 前掲論文 6)
- 29) 前掲論文 10)
- 30) 佐々木全・東信之・坪谷有也・田村典子・福田博美・佐藤信・清水茂幸 (2017) : 個別の指導計画の作成に資する「後方視的対話」の開発とその活用. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集, 4, 108-113.
- 31) 前掲論文 11)
- 32) 佐々木全 (2018) : 個別の指導計画の作成に対する教師の意識—個別の指導計画の作成要領開発のための予備調査—. 生活中心教育研究, 32, 29-34.